

解説記事

実践活動報告／症例報告ショートレポートの執筆にあたって強調すべきポイント

石原 健吾^{*1}、近藤 衣美^{*2}、難波 秀行^{*3}

^{*1} 龍谷大学農学部食品栄養学科、^{*2} 大阪体育大学スポーツ科学部、^{*3} 大阪大学全学教育推進機構

はじめに

日本スポーツ栄養学会では、2022年の第15号サプリメントから、ショートレポートをまとめた特集号を発刊しています。ショートレポートには、学会員（特にスポーツの現場で活動されているスポーツ栄養士の方々）からの論文投稿数をさらに増やすこと（それによりスポーツ栄養のエビデンスをさらに蓄積すること）という目的¹⁾があります。今回、第17号サプリメントを発刊するにあたり、これまで投稿された原稿を振り返り、執筆から採択までを大幅な原稿修正なく、スムーズに行うためのポイントについて記載しました。

実践活動報告ショートレポートでは、「工夫した点」を中心に記載する

これから実践活動報告ショートレポートを執筆しようと考えている方は、実践活動報告をするための4つの条件を意識して、ご自身の栄養サポートを整理されると良いでしょう。その詳細は文献²⁾に記載されていますが、4つの条件とは、①対象と課題、②実践内容、③実践活動の成果、④今後の課題です。このうちもっとも重要な部分は、②実践内容です。実践活動報告ショートレポートを執筆する際には、この②実践内容から強調できる点を選びましょう。例えば、実践手法で工夫した点（新しいサポート・工夫・仕掛け・改善など）や、実践手法で工夫した点がない場合でも、①対象が通常と異なる点、③評価方法が通常と異なる点を取り上げることができます（表1）。

したがって、実践活動報告ショートレポートの限られた短い文章量で原稿を執筆する際には、「工夫した点」を強調することがポイントになります。実際の栄養サポートの現場では、さまざまな工夫をなさっていると思いますが、ショートレポートとしてまとめる際には、すべての工夫について記載するのではなく、1つ、ないし2つの工夫した点だけを取り上げる方が望ましいです。「工夫した点」を絞り込んだ上で、それと関係が深い要素を中心として、①対象と課題、③実践活動の成果、④今後の課題を記載すると、読者に「工夫した点」が伝わるショートレポートになります。

残念ながら、投稿された原稿の中には、「工夫した点」がわかりにくいものが一定数、見られます。執筆の際に「工夫した点」に焦点をさぼる意識を持たずに、サポート現場で行ったこと全体をショートレポートの短い分量の中で詰め込んだ原稿が、その典型例です。このような原稿であっても、著者からヒアリングを行うと、実際の栄養サポート現場では、さまざまな「工夫した点」をお持ちである場合が多いです。そのため、執筆に際して「工夫した点を取り出して強調する」という意識を持っていただくことが、執筆から採択までをスムーズに行う重要なポイントであると感じています。

そのことを、研究教育支援部会では、ワークショップ³⁾、マッチング企画⁴⁾などを通じてお伝えしてきました。また、執筆に際して雛形として用いられる「実践活動報告ショートレポート用テンプレート（ホームページ投稿・関連資料に収載）」の中にも「工夫した点を取り出して強調する」ことを繰り返して強調するように追記しました。執筆時に否応なしに目に入ること、改めて意識していただくことがねらいです。

少し話が逸れますが、栄養サポートをスポーツ栄養マネジメントの流れに沿って報告する場合は、スポーツ栄養マネジメント報告となります。しかしショートレポートの文字数制限の中でスポーツ栄養マネジメントの流れに沿った報告を書くことは困難であるため、スポーツ栄養マネジメント報告ショートレポートという執筆カテゴリは設けていません。スポーツ栄養マネジメントの流れに沿って行われた栄養サポートであっても、「工夫した点を取り出して強調」して執筆下さい。

症例報告ショートレポートでは、「結果（症例）の興味深い点」を中心に記載する

上記のように実践活動報告では、「工夫した点」に焦点をさぼることがポイントとなりますが、著者によっては、特に強調すべき「工夫した点」に思い当たらない、評価方法も通常の方法である、対象者を強調することも難しいとおっしゃるケースがあります。このような場合でも、栄養サポートを行った「結果の興味深い点」を強調していただくことで、症例報告ショートレポートになります（栄養サポートを行わない観察

表 1 実践活動報告ショートレポートにおける「工夫した点」「強調できる点」

実践内容における新しいサポート・工夫・仕掛け・改善の例		
連携方法	強化子	予算設定
実施する場所	調理方法	測定方法
学習形態（オンラインなど）	食べる組み合わせ	食器
使用教材	補食の内容	モニタリング方法
学習内容の提示方法	アセスメント項目	行動目標

参考文献 2 に基づき作成

表 2 A 症例報告ショートレポートにおける引用の範囲について

	I. の本文中の I で参考にした文献を明記した上で表現を利用してよい	独自の表現で記載
タイトル	○	
要旨		○
I. はじめに		○
II. 症例（方法、結果）	○	
III. 考察		○
IV. 結論		○
文献		全く同じにならないように努力する

表 2 B 実践活動報告ショートレポートにおける引用の範囲について

	I. の本文中で参考にした文献を明記した上で表現を利用してよい	独自の表現で記載
タイトル	○	
要旨		○
I. 事業・サポート活動の目的		○
II. 事業・サポート活動の内容	対象者とサポート期間 調査項目 など 定型的な部分	栄養サポートの内容など 工夫した部分
III. 事業・サポート活動の成果	評価項目の結果 など 定型的な部分	
IV. 今後の課題		○
文献		○全く同じにならないように努力する

実践活動報告か症例報告か？

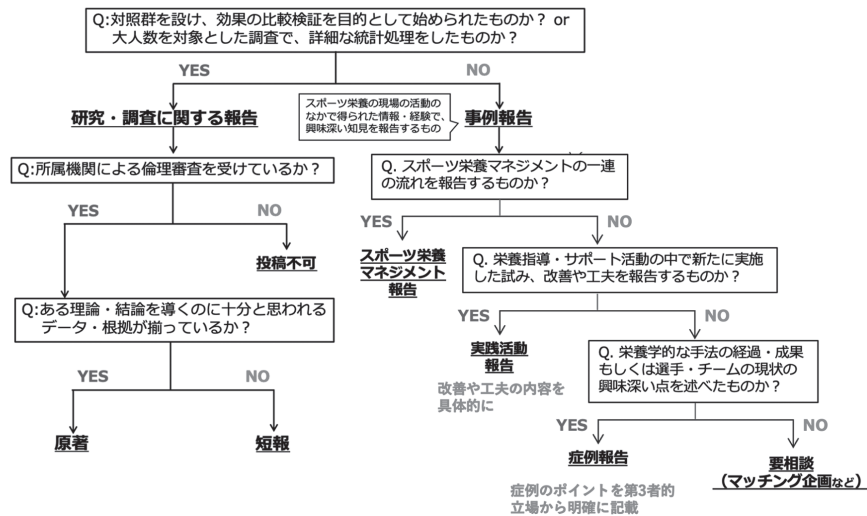
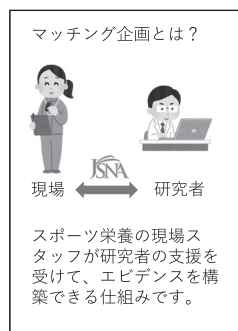


図1 原稿区分を判断するフローチャート



詳細は学会
HPへGO

日本スポーツ栄養学会

マッチング希望開示 あり

発表者名：○○○○¹⁾、△△△△²⁾、××××³⁾

所属：1) ○○○○、2) △△△△、3) ××××

連絡先 (E-mail: _____@_____)

図2 学会大会におけるマッチング希望演題表示スライド

的な症例報告ショートレポートでも、興味深い点を強調していただくことがポイントになります)。

症例報告ショートレポートにおいても、限られた短い文章量で原稿を執筆する必要があります。その際、対象者の基礎情報、トレーニング・身体活動状況、食事摂取状況などにおいて、特に強調すべき「工夫した点」がなく、評価方法も通常の方法で行った場合には、得られた結果を簡潔にまとめることになります。先行研究で似た症例がある場合には参考にしたり比較したりしながら、ご自身の選手やチームの症例の特徴をまとめるところから始めてみましょう。

実際、投稿された症例報告ショートレポートにおいて、文章表現が先行研究論文と非常に類似しているも

のがありました。日本スポーツ栄養学会では、他学会と同様に、論文執筆においては独自の文章表現で記載することを前提としています。一方で、学会員（特にスポーツの現場で活動されているスポーツ栄養士の方々）からの論文投稿数をさらに増やすこと（それによりスポーツ栄養のエビデンスをさらに蓄積すること）という目的¹⁾のためには、ショートレポート執筆における困難性は高めない方が望ましいと考えています。

本件については、研究教育支援部会を中心に、理事会でも検討しました。実際、当該論文については、データの帰属はオリジナルなもののですが、文章表現については類似点が多くありました。そこで原稿の修正に際しては、引用した論文を参考文献だけでなく、<はじ

めに>の本文中で参考にした論文を明記する前提で、<タイトル><症例><図表>部分については類似の表現を可能としました。一方で、<要旨><はじめに><考察>については、独自の文章表現に修正を依頼しました（表2）。このことは、ショートレポート用テンプレート（ホームページ投稿・関連資料に収載）にも追記しました。改訂原稿は、研究教育支援部会を中心に査読を行い、その後すみやかに再公開する予定です。今後は、会員全体への啓発活動を引き続き行うとともに、関連規定の整備、ショートレポート査読プロセスを改善することでさらにショートレポートの執筆、採択がスムーズになると考えています。

最後に

本稿では、執筆から採択までを大幅な原稿修正なく、スムーズに行うためのポイントについて記載しました。大幅な原稿修正の最たるものは、投稿区分の変更です。投稿区分を判断するためのフローチャートも、上記記載に対応したものがホームページ投稿・関連資料に収載されています（図1）。原稿区分が判断できない、工夫した点、結果の興味深い点がわからない、などの場合は、年に数回行っている「マッチング企画」にご参加下さい。通常のマッチング企画はオン

ラインで行っていますが、年に一度、対面でマッチングを行う機会があります。第9回大会（2023年、龍谷大学）での試行を経て、第10回大会（2024年、女子栄養大学）からは本格的に、一般演題発表において、「マッチング希望」を発表冒頭に明記していただき（図2）、大会会場にてスポーツ栄養士と研究者のマッチング成立を後押ししています。

学会大会の魅力は、聴講するだけでは十分に味わうことができません。発表してみると、思いがけない交流が生まれるものです。学会大会をきっかけにして、リアルな学術的な交流が生まれ、ショートレポート投稿につながることを研究教育支援部会一同、願っています。学会大会の場合の「リアルマッチング企画」について、アイデアがありましたら、ぜひ研究教育支援部会(jsna.case.report@gmail.com)までお寄せ下さい。

文 献

- 1) 寺田 新：日本スポーツ栄養研究誌, 15 Supplement, 3-7 (2022)
- 2) 木村典代：日本スポーツ栄養研究誌, 14, 17-19 (2021)
- 3) 近藤衣美、石原健吾：日本スポーツ栄養研究誌, 15 Supplement, 20 (2022)
- 4) 寺田 新：日本スポーツ栄養研究誌, 16 Supplement, 22-23 (2023)